

3. 日本人における心電図脚ブロックの心血管死予測能力について —NIPPON DATA80 24 年追跡結果—

研究分担者 中村 保幸（龍谷大学農学部食品栄養学科 教授）
研究分担者 岡村 智教（慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学 教授）
研究協力者 猪原 拓（慶應義塾大学医学部循環器内科 助教）
研究協力者 香坂 俊（慶應義塾大学医学部循環器内科 専任講師）
研究協力者 渡邊 至（国立循環器病研究センター予防健診部 医長）
研究協力者 東山 綾（予国立循環器病研究センター防医学・疫学情報部疫学研究推進室 室長）
研究分担者 門田 文（滋賀医科大学アジア疫学研究センター 特任准教授）
研究分担者 奥田奈賀子（人間総合科学大学人間科学部健康栄養学科 教授）
研究分担者 大久保孝義（帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座 教授）
研究協力者 長澤 晋哉（金沢医科大学医学部公衆衛生学講座 講師）
研究代表者 三浦 克之（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 教授）
研究分担者 岡山 明（生活習慣病予防研究センター 代表）
研究分担者 上島 弘嗣（滋賀医科大学アジア疫学研究センター 特任教授）

目的

完全左脚ブロックは正常に比べ一般に予後不良と考えられている。しかし一部にこのことを否定する研究報告がある。今回 NIPPON DATA80 24 年追跡データセットを用いて検討した。

方法

NIPPON DATA80 24 年追跡データセットを用いて種々の心電図脚ブロックが心血管死および総死亡に及ぼす影響について検討した。追跡開始時の 1980 年に 30 歳以上の無作為抽出住民に生活習慣調査、既往歴聴取、診察、血液・心電図他の検査等を実施した。9,090 人（男性 44%、平均年齢 51 歳）を対象に追跡を行った。

結果

24 年の追跡期間中に 886 人の心血管死、2,597 人の総死亡があった。研究参加者のうち 0.2%に完全左脚ブロックが、1.3%に完全右脚ブロックがあり、4.3%にその他の心室内伝導障害があった。生化学検査結果、他の心電図所見などを調整因子とした多変量 Cox 解析によると完全左脚ブロックは心室内伝導障害を有しない参加者に比べ有意に高い心血管死亡率と総死亡率を示した（男女合計結果 - 心血管死亡：ハザード比[HR]=2.71, 95%信頼区間 [CI]:1.35-5.45, P=0.005; 総死亡：HR=2.07, 95%CI:1.26-3.39, P=0.004）。しかし完全右

脚ブロックと他の心室内伝導障害は心血管死、総死亡に対して有意な影響を示さなかった。

結論

完全左脚ブロックは背景因子および他の心電図所見とは独立して血管死、総死亡に対して有意な影響を示した。